「うわぁ！　何これ、美味しい！」
祖母の誕生日に顔を見せた叔父の作ってくれた、鶏のソテーにレオンは、歓喜の声を上げた。
香辛料をまぶし、こんがりと両面を狐色に焼かれたソテーは、皮目はパリッと香ばしく、中はふっくらとジューシーで、噛むと心地良い弾力と共に、甘みと旨味たっぷりの肉汁が溢れ出てくる。
「すごい……。でも、どうしてこんなに柔らかいのかな？」
夢中で半分食べた後、一旦、フォークとナイフを止め、じっくり切った断面を見ながら、残り半分を一口ずつ、ゆっくりと味わって食べる。
「……臭みが全然ない。丁寧に余分な脂を除いてあるんだ。そして……」
レオンは調理場の竈に目を向けた。
「二枚の厚い鉄の平鍋……、叔父さん、もしかして重しを掛けて焼きました？」
「正解。流石、兄さんの子だ」
八歳にして、自分の作り出した工夫をあっけなく見抜いたレオンに、流しで洗い物をしていた叔父が、振り返り苦笑を浮かべる。
「でも、一つ知らない味と香りがあります……。叔父さん、この全体に香辛料と一緒にまぶしたハーブは何ですか？」
「その上、それにまで気付くとはね……」
榛色の瞳を楽しげに笑ませて、エプロンで濡れた手を拭くと、叔父はズボンのポケットから小さな小瓶を出した。
「これだよ」
レオンが差し出された小瓶を受け取り眺める。中には半分ほどに減った、濃い緑の葉を細かく刻んで乾燥させたモノが入っていた。
「シテ島の遺跡の空中庭園にしか生えてないハーブだ。清涼感のある味と匂いがあり、肉と脂の臭みを消し、柔らかくしてくれる」
叔父の言葉にレオンはもう一口、小さく切ったソテーを口に入れた。微かに感じる苦み、すっきりした匂いが、口

の中にしつこく残る鶏の脂を消してくれる。
「遺跡の案内人をしている彼女が取ってきてくれるものだよ。このソテーも鶏肉の好きな彼女の為に考えたレシピなんだ」
叔父もレオンも、貴族の名家、ヴェロワ家に代々仕えるお抱え料理人の一族の者だ。だが、叔父は貴族より、大衆相手に腕を奮いたいと家を飛び出した。彼にとっては母に当たる、祖母の誕生日には毎年、屋敷を訪れるが、肩身が狭そうにしている顔に、自慢げな笑みが広がる。
「もしかして、その方は叔父さんの恋人なのですか？」
怒った祖父から勘当された叔父は、もう正式に婚姻を結ぶことは出来ない。レオンの問いに叔父は「ああ……」柔和な顔を少年のように、はにかませた。
「こんな私でも良いと言ってくれた、とても強くて素晴らしい女性(ひと)だよ」
彼女を想ったのか、うっとりと唇が緩む。
「彼女の喜ぶ顔の為に作ったんだ」
その笑顔を思い浮かべているのだろう。心底嬉しそうに叔父が笑う。何故かその時レオンは子供ながらに、その笑みが、胸が苦しくなるほど羨ましいと感じた。

春の昼下がり陽光に、微妙な赤茶色の濃淡が光る煉瓦の通りの上を、すんなりと伸びた尻尾の影が揺れる。
行きつけの食堂の入り口の前の、小さなメニューの看板を見下ろし、彼女は筋肉のよった逞しい腕で
「おばちゃん！　メシっ！　今日のオススメと、この店で一等良い酒っ!!」
ドアを力任せに開けた。
「おい！　ソニア！　壊れたら弁償して貰うぞ!!」
すかさず調理場から、ダミ声を飛ばしてきた店主を、いつものように金色の瞳でギロリと睨んで黙らせ、窓際のテーブルに着く。
まだ夕飯には早い時間帯。のんびりと午後のひとときを

楽しんでいた客達が、入ってきた背の高い緑の肌の竜人を見て、驚きを顔に浮かべた。
「ソニア……？」
女性としての起伏に乏しい、逞しい身体に首を傾げている者もいる。だが、誰かが
「ほら、リュテス一の遺跡案内人と言われる……」
囁くと「ああ……例の……」納得した顔で食事に戻った。
「また今日は随分とおかんむりだね」
接客を担当しているおばちゃんが、テーブルの上に水を入れた瓶とワイン、グラスを持ってくる。
「聞いてくれよ、おばちゃん。昨日の客、散々遺跡で手間掛けさせたあげくに、こっちに難癖つけて案内料を半額に値切ってきたんだぜ」
トカゲに似た、突き出た鼻を上げ、白い髪から出た、尖った耳を怒りにピクピク震わせながら、ソニアは、人の良いおばちゃんの笑顔に訴えた。
「そりゃあ、また世間知らずの命知らずがいたモンだ」
彼女を良く知る常連客の中から、茶々が入る。
「で、どうしたんだい？」
「半額しか払わねぇなら、半額分の仕事にするって、首根っこ掴んで遺跡の入り口まで引き摺って行ったら、泣いて謝って全額払った」
ニヤリと楽しげに問い返した、おばちゃんにソニアがしてやったりと笑む。
「やはりなぁ」
食堂に笑い声が弾けた。
取り敢えず怒りを口に出し、ムカっ腹が少し落ち着たソニアは、グラスにワインを注いだ。店で一番高いといっても、貴族のお抱え葡萄園が作るような高級なモノではない。だが、店主が、知り合いの村から仕入れる、その年一番出来の良い葡萄で出来たワインなのだろう。その辺の路上で売っているヤツとは全くの別物だ。竜人の鋭い嗅覚にさえ難一つ見当たらない、たっぷりした芳醇な香りに、鼻をうごめかすと彼女はグラスを傾けた。

ここリュテスは、ルテティア王国の中央、トー湖の真ん中にあるシテ島に造られた街だ。シテ島は島全体が古代魔法王国の遺跡で、古代の人々は英知と魔力で『魔王』を支配し、湖の上空に浮かぶ王都を、周辺にいくつもの都を造り繁栄していたという。が、王国末期に起こった『魔王』の反乱により、王都は湖に落ち、衝撃で起きた津波が都を次々と飲み込んで、古代王国は滅んだと語られていた。

ソニアはその遺跡の案内人。遺跡は代々、ルテティア王国の調査団によって目欲しいものは、あらかた王城の宝物庫や貴族の屋敷に納められているが、なにしろ一般家庭にまで魔法が浸透していた国だ。まだまだ探せば、古代の魔法道具が見つかることがある。

それを目当てにやってくる冒険者や探検家、盗賊に頭を悩ませていたルテティア王が、いっそそれならと遺跡を解放し、島唯一の街を、彼等の滞在地として整備したのだ。

遺跡は落下したときの衝撃で崩壊し、複雑に通路が入り組み、中には魔法使い達の創った魔物が、生き残り徘徊している。

それでも構わないなら出入り自由、手に入れたお宝は入手税を払えば持ち帰りも自由。つまりは国営の、チップの代わりに己の命を賭けるギャンブル場のようなものだ。

そこで、より安全に、より確実に遺跡を探索したいという要望に応えて、街に滞在していた冒険者達の一部が『案内人』という稼業を始めた。遺跡に客と共に入り、道案内や罠の解除、魔物の回避等をして、目当ての場所やお宝に導く。

ソニアは、案内人を始めた冒険者だった爺さんに、拾われて育てられた童人だ。そして、爺さん亡き後、もう百年もリュテス一の案内人として、名を馳せている。

→→→つづきは

《おねショタ》アンソロジー『∞-infinity-』で！